



TITLE:

<書評>田中耕治・西岡加名恵 『総合学習とポートフォリオ評価法』

AUTHOR(S):

荒木, 寿友

CITATION:

荒木, 寿友. <書評>田中耕治・西岡加名恵 『総合学習とポートフォリオ評価法』 . 教育方法の探究 2000, 3: 100-102

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190234>

RIGHT:

【書評】

田中耕治・西岡加名恵『総合学習とポートフォリオ評価法』

(日本標準、1999年12月1日発行、126ページ、2100円)

荒 木 寿 友

先日ドラマにおいて生徒と教師の次のようなやりとりがあった。「先生、理科のレポートで通知表をつけるのはやめてください。どうして〇〇さんのほうが私より評価が低いのですか？一緒にレポートをしたのに…。私と〇〇さんとの関係はもう終わりです。試験をして下さい。」「あなたのほうが科学的な考察ができていたから4をつけたんだけど…。テストをする気はないわ。」(『中学生日記』、2000年、2月6日放送)というように、教育現場では評価に対する生徒の不安、教師の困惑が見受けられる。そもそも評価とは何のために行うのか？まして生徒に評価を任せる自己評価にはどのような意義があるのか？総合学習において評価はいかに展開するのがよいのか？という問題に対して、ポートフォリオ評価法を携えて真っ向から立ち向かうのが『総合学習とポートフォリオ評価法』である。

本書でキーワードとなっているのは、「総合学習」、「評価」、そして「ポートフォリオ」である。まずはこの3つのキーワードを押さえることで、本書の枠組を捉えていきたい。

第一章「今、なぜ総合学習なのか」(田中耕治)において、田中氏は総合学習と教科学習の関係について、教科学習の固有の役割を認めつつ、総合学習は教科学習には解消されない独自の質、すなわち「体験」「直接経験」の重視、課題の総合性と方法知、「表現を基礎にした評価」、を持つ活動であると位置づける。そして総合学習を教育課程上の「領域」と見なして、総合学習と教科学習の「相互環流」が必要であると述べる。

では、評価とは何であろうか。端的に言えば、それは一連の教育活動を反省するために、そしてそこから新たな方向性を見出すために行われるものである。第二章「教育評価を考える」(田中耕治)では、「絶対評価」「相対評価」「個人内評価」「到達度評価」という評価の歴史的経緯、またそれらの意義を捉え、それぞれの評価法の長所、短所を踏まえた上で、今後の教育評価には、到達度評価という外的評価と個人内評価という内的評価の内在的な結合という立場の必要性を説く。内的評価、すなわち自己評価とは「子どもたちが自分で自分の人となりや学習の状態を理解し、それによって得た情報によって、自分を確認し今後の学習や行動を調整すること」である。教育評価は、このような自己評価の契機を包含するものでなければならず、教師の側からのねらいとして存在する到達度評価と、子どもたち自身の自己評価が相互作用することによって、教育評価本来の意義が見出せるのである。内在的な結合という評価法として著者が提起しているのが、

「表現を基礎にした評価」である。

最近でこそ教育学に限らず、さまざまな分野でポートフォリオという言葉を目にするようになってきている。第三章以降で論じられるポートフォリオを用いた評価法とは、「子どもが学習の過程で生み出す作品を、系統的また長期的に収集することによって、子どもの自己評価を促すもの」であり、「教師は子どもの学習の結果だけでなく過程を、いろいろな側面から深く理解し評価することができる」のである。ここに、「表現を基礎にした評価」における外的評価と内的評価の内在的な結合がみられる。

第三章「ポートフォリオ評価法とは何か」（西岡加名恵）では、ポートフォリオ評価法の基本的な考え方が丁寧に展開されている。西岡氏はポートフォリオ評価法の原則（子どもの作品を系統的に集めることや、記録の仕方等）、評価基準、指導と評価のあり方に論述を行っている。これらを踏まえて、総合学習においてポートフォリオ評価法をどのように用いるかについて論じているのが、第四章「総合学習でポートフォリオを使ってみよう！」（西岡加名恵）である。とりわけこの章ではさまざまな実践校の事例を取り入れ、総合学習で子どもが身につける「力」（対象をリアルに見る力や、活動を計画する力など）について解説している。

本書の特徴として次の2つがあげられる。第一に、先にも述べたが、数多くの実践例を踏まえてポートフォリオ評価法が述べられている点である。教師がいざ実践へと取り入れようとする際に、実に11もの学校の事例を取り上げていることは、実践者にとって心強いほかない。適所に設けられた図や資料には、さまざまなポートフォリオの形態や、実際の授業の展開方法について示してある。「はじめに」で述べられているように、本書はアメリカの実践を踏まえつつも、そこに留まることなく、日本という土壌でポートフォリオ評価法が活かされるべく配慮して構成されているのである。

第二の特徴としてあげられるのが、「コラム」、「用語解説、キーワード」などの欄を設けて、本書をより深く学べるよう試みている点である。読者が本を読んでいると困るのが、自明のこととして論じられていることに対する無知である。総合学習と銘打った本は数多く存在するが、それらの多くは研究者側からの主張に終始するものが多く、本書のように読者の立場に立った本は、他に類をみない。

さて、過去の著作から見出せる田中氏の一貫した主張は、学校教育において学力をいかに保障するか、ということである。『学力評価論入門』（1996年）では、「到達度評価と個人内評価の内在的な結合」を行うことによって、真の学力保障が実現できると論じていた。続く『学力評価論の新たな地平』（1999年）では、「内在的な結合」を具現する評価法の一つとして「表現を基礎にした評価法」の重要性を説いている。このようにしてみると、本書の位置づけは必然的に以下のようにならねよう。つまり、「到達度評価と個人内評価の内在的な結合」というテーマに対して提起された「表現を基礎にした評価」の具体的ストラテジーを示したのが、ポートフォリオ評価法なのである。田中氏が過去の著作において論じていなかった実践面を強く前面に出している

ところが、本書の独自性であり、最も評価されるべき点である。

先に、田中氏の一貫した研究テーマは子どもの学力保障であるとしたが、この学力保障は1970年代になって説かれ始めた子どもの学習権に端を発するものである。「学習することは、発達可能態としての子どもたちにとってまさに生存の根本に関することがらである」（田中、1996年）と論じているように、子どもたちの学習する権利を保障することは、子どもの発達の権利を保障することから派生するものである。ここから、発達に対する捉え方の違いから、学習についての考え方も異なってくることが考えられる。

たとえば、「発達の促進」という立場から心理学的に教育を捉えた人物としてあげられるのが、発達の最近接領域論を展開したヴィゴツキーと、学習のレディネスを示したブルーナーであろう。両者は共に、発達に先回りする教育を行うという点では共通しているものの、前提となっている教育観が異なっている。「教育は発達のまえを進むときにのみよい教育である」（ヴィゴツキー、L. S.『思考と言語』、1979年）とヴィゴツキーが述べるように、彼は子どもの現在の到達水準と、到達可能なより高い水準との間にある「最近接領域」に教育的に働きかけることに、教育の本質的な意義がみられるとした。これはどちらかといえば、教える側の働きかけによって発達を促進し、概念や技能の取得に重点をおいているといえる。つまり、教え手の主導性に積極的な意義を見出しているのである。

一方ブルーナーは、「学習のための動機づけは…できるだけ学習することそれ自体に対する興味の喚起にもとづくものでなければならない」（ブルーナー、J. S.『教育の過程』、1963年）とする内的動機という用語に代表されるように、子ども自身による学びへの能動的な働きに重点を置き、そこから発達を捉えている。つまり、教え手の働きかけよりもむしろ、学び手の働きをより重要視しているといえよう。

この両者の発達観のどちらが正しいとはいえない。むしろ、両者の相互補完的な関係が、現代の新たな教育心理学を創り出している。この関係を、先に示した到達度評価と個人内評価に当てはめてみるならば、ヴィゴツキー的な教育者の働きかけを重視する立場は、教師によって設定された目標にどれだけ子どもが到達したか教師が評価を行う、到達度評価に該当するであろう。ブルーナー的な学び手の自発性を重視する教育は、子ども自身が自らの活動を評価する個人内評価に該当すると考えられる。そして、本書で述べられている両者の内在的な結合を表すポートフォリオ評価法とは、発達の促進を目論むヴィゴツキーとブルーナーの長所を統合せんとする、新たな発達観に基づいた評価法であるといえるのではないだろうか。このように捉えると、本書で展開されているポートフォリオ評価法は、今後の教育評価の重要な柱の一つになってくるであろう。教育方法学における今日の課題である「学び」と「教え」の結合を見出すことに、本書は成功しているのではないだろうか。

最後になったが、本書のサブタイトルには「入門編」と示してある。今後「応用編」へと続いて、私たちに新たな示唆を与えてくれることを願う。

（京都大学大学院教育学研究科 修士課程2年）